

## 体型を考慮した和服の縫製方法（第5報）

仲 村 洋 子、永 野 順 子

### I はじめに

洋服を着るような気軽さで着られる和服を求めて、これまで採寸によって体格を把握して、割り出し法を用いて仕立て上がり寸法を算出してきた。そして、その結果は前回までの報告により、徐々にではあるが、おおむね良好な方向に推移している。

しかし、体格の形態的な特徴をあらわす体型は、一口に「肥満体」・「瘦身体」といっても個人差がある。一般的に肥満体といっても、胸部・腹部ともに張っている体型の人も、腹部に対して、胸部の薄い体型の場合もある。瘦身体でも前屈・後屈では体型の表情が異なるように、おのずと縫製方法を変化させ、欠点を補うことによって美しく着装することもできるし、着やすさも生まれる。

採寸では把握しきれない細かい体型の違いを是正する試みとして、瘦身体の被験者のものは剣先位置をあげ、肥満体のもは裁切り身丈を延長して、ある程度の成果を挙げたのが第4報<sup>1)</sup>である。こうした縫製方法は、これまで何となく目にしてきた先導者の経験による技術である。

ここでは、先導者の縫製方法を体型別に体系づけるとともに、肥満体の被験者の試着衣を修正しながら着装実験を行った。そして、採寸、割り出し法および縫製の工夫の3条件を揃えて、より気軽により美しく着られる和服の縫製方法を模索するのが本研究の目的である。

### II 体型を考慮した縫製技術

和服は一般に標準寸法によって縫製される。したがって、明治時代に刊行された多くの裁縫書は著者の長い経験による技術を、平易な言葉や図解を多く用いることで、わかりやすく

## 裁縫書に見られる体型を考慮した縫製技術

書名	新編 裁縫之秘書	塩原式裁縫書	現代和洋 裁縫全書	中等学校・専門学校 裁縫と教材と其指導	和服裁縫 大全集
著者	高橋貴四郎	塩原千代子	大妻コタカ	市橋なみ	新井兵吾編
発行年月日	大正4.8.5	大正14.2.25	昭和9.2.25	昭和11.2.20	昭和12.1.1
衿肩明きと 繰り越し		繰り越しをつけないと衿付きわに棚の如き横皺 抜き衣紋の場合 は肩山の中心が後ろに引け前後の袖付けが互いにくい 違い不恰好なうえに、胸部にたて皺	肥えて肩の厚い体型…衿肩明きを10.5cm、繰り越し3cmとし、衿はばち衿 痩せて首が長い なで肩の体型…繰り越しはつけずつけ込み3cm 衿は広衿	肥満で首が太く短い又はいかり肩の体型…衿肩明きを大きく 首の細い なで肩の体型…衿肩明きを小さく	普通はつけ込みだけに するが、衣紋を抜く時は繰り越しを1.9cm いかり肩で衣紋を抜く時…繰り越し2.7cm、つけ込み2.7cm、衿のゆるみ1.5cm、つけ込みは3cmが限度
剣先と 衿下がり			肥えて肩の厚い体型…衿下がりを繰り越しの山から21cm		剣先の仕立方は衿先の布を剣先位置で曲げる
身幅及び 衿つけ線	袖幅を広く肩幅を狭く、身幅も狭く仕立てると優美に見え、帯を締めた時に皺ができない 後幅28.5cm、前幅23cm、衿幅15cm	特に足の太い体型…衿幅を標準より0.8cm～1cm加える	肥えて肩の厚い体型…前幅を衿下寸法まで真直ぐ、剣先位置を衿肩明き-0.6cmとし、前幅と少し丸みをもたせて結ぶ。後幅29.5cm 痩せて首が長い なで肩の体型…抱幅を20cmとし、裾の前幅と結ぶ	胸部、腹部の張った体型…裾の真直ぐな部分を多くし、上半身の曲がり多く 胸部の特に薄い体型…衿肩明きより抱幅までの曲がり を少なく又は真直ぐ 前屈体型…比	特別に太った体型…剣先位置は衿肩明きで1.9cm控えた位置と抱幅を結び、その線上に衿下がり寸法を取る 後幅32.2cm、前幅28.4cm、抱幅26.9cm、衿肩明き11.4cm、繰り越し2.7cm、衿幅16.3cm、合襷

和服裁縫	写真と図解の和服裁縫	和裁	新被服構成学	図説きもの仕立方	その他の裁縫書
藤田とら	岩松マス	土井幸代	坂本弘子	村林益子	
昭和24. 4. 25	昭和36. 11. 1	昭和44. 4. 5	1984. 3. 15	平成2. 1. 27	
非常に太った体型…衿肩明き11.5cm、繰り越し2.7cm いかり肩で衣紋を抜く時…繰り越し2.7cm、つけ込み2.7cm、衿のゆるみ1.5cm、つけ込みは3cmが限度	衿肩明きが大きいと衿あしが広く見え、反対に小さいと衿肩明きの両角に皺ができ、きゅうくつな感じ		首が太く短い体型…繰り越しを多くし、抜き衣紋にゆったり着装	体格のよい人や抜き衣紋に装着する人は繰り越しを多くする	『改訂新版新和服裁縫』特に太った人、衣紋を抜く人…繰り越しを多く 『独自自在裁縫初歩より奥儀まで』一般の婦人は3cm以上の繰り越しはしない
剣先の仕立方は衿先の布を剣先位置で少し余分に曲げる	剣先が身体を中心線に一致するよう胸幅を割り出し、衿下がりを決定		肥満の体型…衿下がりをも1cm下げる 乳房大の体型…衿下がりをも2cmあげる		『実用本位の裁縫学習書 裁縫のしへ』剣先の太さは剣先より8cm下で2.2cmの幅 『裁縫の栞』（上の巻）剣先の角度は剣先より20cm下で5～5.5cmの幅 『改訂新版新和服裁縫』太って背の低い体型…衿下がり21cm
特に腹の出た体型…裾から抱幅まで真直ぐ 非常に太った体型…剣先位置は衿肩明きで2cm控えた位置と抱幅を結び、その線上に衿下がり寸法を取る 肥えた体型の	一般的な仕立方法注意…抱幅が狭いと衿元がはだけ、広いと胸に皺がよる。衿幅と合襷幅は同寸	肥満体型…前幅を広く 腹部肥満体型…前幅を着丈の1/2まで真直ぐにし、剣先位置を衿肩明き-1cmとして結ぶ 胸部肥満体型…前幅を着丈の1/2まで真直ぐにし、剣	瘦身体型…後幅を狭める 腹部肥満体型…ゆとりを十分入れ、衿幅、合襷幅を同寸 肥満体型…衿付線を中心に移動し、抱幅を広げる	一般的な仕立方法注意…胴回りを基準とする。前幅・後幅とも自然に裾で0.8cm詰める 抱幅位置は身八つ口から4cm下抱幅と前幅の差を少なく 胸の豊かな体	『改訂現代の和裁』痩せて小柄な体型…剣先位置を1～2cmあげる 『改訂新版新和服裁縫』腹部肥満体型…合襷幅を広く 『改訂現代の和裁』肥満体型…衿下寸法まで前幅を真直ぐ

			後幅28cm、前幅22cm、抱幅20cm 肩幅-0.4cm、 袖幅+0.4cm	較的曲がりを多く 後屈体型…比較的曲がりを少なく	幅14.6cm
胸のたて皺 予防の仕立 方	袖口を広く、 袖丈を長く (袖口が後に おり返り袖が 後ろに引かれ て胸の皺が伸 る)	肥満体で胸に 皺がでる時は、 衿下がりの間 で1cm位深く 繰りこんで衿 をつける。帯 の下になる所 で衿をつらせ る	肥えて肩の厚い 体型…衿の衿流 れ丈より衿を1 cm位つめて、帯 の下になる所で 衿をつらせ、衿 幅は狭めに 瘦せて首が長く なで肩の体型… 繰り越しはつけ 込みに、衿の衿 つけ部分は衿を つらす。袖付寸 法を標準より少 しつめる		胸のたて皺を防 ぐには衿肩明き より7.6cm下が った所で0.8cm くって衿をつけ る
備 考	※裁縫教員お よび文部省の 検定受験者の ための参考書 ※尺貫法によ る表示をメー トル法に換算	※一般青年子 女のための裁 縫書	※和裁・洋裁の 初学者のための 参考書	※中等学校・ 専門学校の裁 縫指導者のた めの参考書	※「婦人倶楽部」 昭和12年新年号 付録

<p>寸法…後幅30cm、前幅24cm 衽幅16cm 腹の出た体型の寸法…裾から抱幅まで真直ぐにし、合襷幅は14.5cm</p>		<p>先位置を衽肩明き-1.5cmとして結ぶ</p>		<p>型…前幅は腰囲まで真直ぐ 体格により抱幅と前幅は同寸又は抱幅を前幅より広げる 体格に応じた縫製…衽幅、合襷幅を同寸 身幅を広げる時は前幅で 細身体型寸法…後幅27cm、前幅21cm、合襷幅13.5~14.2cm その他</p>	<p>『独習自在裁縫 初歩より奥儀まで』着付けによって寸法を決定 『実用本位の裁縫学習書 裁縫のをしへ』少し肥えた体型…前幅を減らし後幅を増す 標準体型 後幅28.4cm、前幅24.6cm、肥えた体型後幅30.5cm 前幅23cm</p>
<p>胸のたて皺を防ぐには衽肩明きより8cm下がった所で0.8cmくって衽をつける</p>	<p>身頃の衽付位置を注意するとともに衽の衽流れ丈に対して衽を2cmつらせる</p>	<p>胸のたて皺を防ぐには肩山から6~7cm下がった所で0.5~1cm繰りこんで衽をつける</p>		<p>胸に皺がでる時は衽下がりの間で0.8~1cm位深く繰りこんで衽をつける 抱幅が27cmと広い場合は、衽下がりの間で2cm衽をくる</p>	<p>『実用裁縫要鑑』肩から胸にかけての皺を防ぐために、衽肩回りで衽を1.5cmゆるめる</p>
<p>※一般主婦のための裁縫書</p>	<p>※一般主婦のための裁縫書</p>	<p>※大学・短期大学の被服専攻生を対象とした参考書</p>	<p>※大学・短期大学の被服専攻生を対象とした教科書</p>	<p>※伝統的な裁縫職人の縫製法を初心者にも参考になるように記した裁縫書 ※「その他」は前幅と抱幅の差の多い場合の縫製方法</p>	<p>『独習自在裁縫 初歩より奥儀まで』は尺貫法による表示をメートル法に換算</p>

伝える工夫がなされた。

時代がくだるにしたがって、個々人の体格の差が目につくようになり、洋裁の影響もあって、体型を考慮した縫製が取り上げられるようになった。こうした体格を把握するために、採寸という方法を用いるようになるのは大正末期からである。しかし、それ以前から人にはそれぞれ個性があるように、からだつきも異なることを感じ、これに対応する縫い方を記した裁縫書も現れている。

今回、実際に調査した中から抽出した16種の書籍は、一定の基準を設けたものではなく、できるだけ広い範囲の読者・利用者を想定し、編纂目的を異にする裁縫書を対象とした。これらに記載してある体型に配慮した記事を取り出したのが「裁縫書に見られる体型を考慮した縫製技術」の表である。

この表には記載していないが昭和30年後半以降、長身瘦身体型が増加するにしたがって、肩幅と後幅との差の解消法が多く記されている。これは袖幅を広げることで解決されることもあるが、肩幅にまで影響した場合の処置法である。その他、体型による袖付寸法について触れている裁縫書もある。

このたび表として取り上げた項目は、「衿肩明きと繰り越し」・「剣先と衿下がり」・「身幅と衿つけ線」および「胸のたて皺予防の仕立方」である。すなわち、主として下半身の身幅が上半身の胸元におよぼす影響の処理方法を捕らえたものである。そこで、各裁縫書は著者独自の経験によって工夫されたものではあるが、何らかの共通点が見出せるのではないかと期待をもって作成した。各裁縫書を項目別に比較すると、次のようなことが窺える。

#### 1. 衿肩明きと繰り越し

- (1) 肥満体で首の短い人は衿肩明きを大きく、繰り越しを多くする
- (2) 瘦身体で首の長い人は衿肩明きを小さくして、繰り越しはつけ込みにする
- (3) いかり肩の人は繰り越しを多くする
- (4) 衣紋を抜きたい時は繰り越しをつけ込みにする
- (5) 繰り越しもつけ込みも普通3 cm以上にはしない。いかり肩で衣紋を抜きたい場合は両者を併用する

#### 2. 剣先と衿下がり

- (1) 剣先位置の上下移動が胸元のゆとりにおよぼす変化を配慮し、体型に合わせて衿下がり寸法を定める
- (2) 衿つけ線や衿のつけ方が胸元のゆとりを左右するところから、剣先の角度によって衿下がり寸法を定める

(3) 剣先を美しく縫製するためには、剣先のきせを心持ち深くする

### 3. 身幅と衽つけ線

身幅は腰囲によって割り出される。普通その寸法を裾で定めて抱幅ないしは剣先位置と結ぶ。つまり、裾では腰囲に必要な寸法になるが、縫製方法によっては肝心の腰周りで、その寸法が保たれるとは限らない。これが体型によって大きく響く場合がある。これを解決する方法として次のような処置が取られている。

- (1) 前幅を衽下寸法ないしは着丈の2分の1まで真直ぐにする
- (2) 衽幅と合襷幅を同寸にする。(1)と(2)を併用すると腰周りの位置で腰囲に必要な身幅が生じる
- (3) 肥満体型の場合は抱幅を決めるか、剣先位置を体の中央に移動する。いずれにせよ抱幅を広げる
- (4) 胸部の薄い人は抱幅を狭めて、衽肩明きから抱幅までの曲がりを少なくする

### 4. 胸のたて皺予防の仕立方

胸元のたて皺は目につきやすく見苦しいものである。これは体型によって皺の位置や向きを異にするが、解決するには縫製方法によるところが大きい。

- (1) 衽下がりの衽つけ線を前身頃をえぐるように弓なりにする
- (2) 肩まわりから衽下がりにかけての衽に充分のゆるみを持たせる
- (3) 衽流れの間の衽をつらせぎみにする。衽つけ部分の衽が垂れないように、衽先をよく引きあげて衽つけの待ち針を打つ

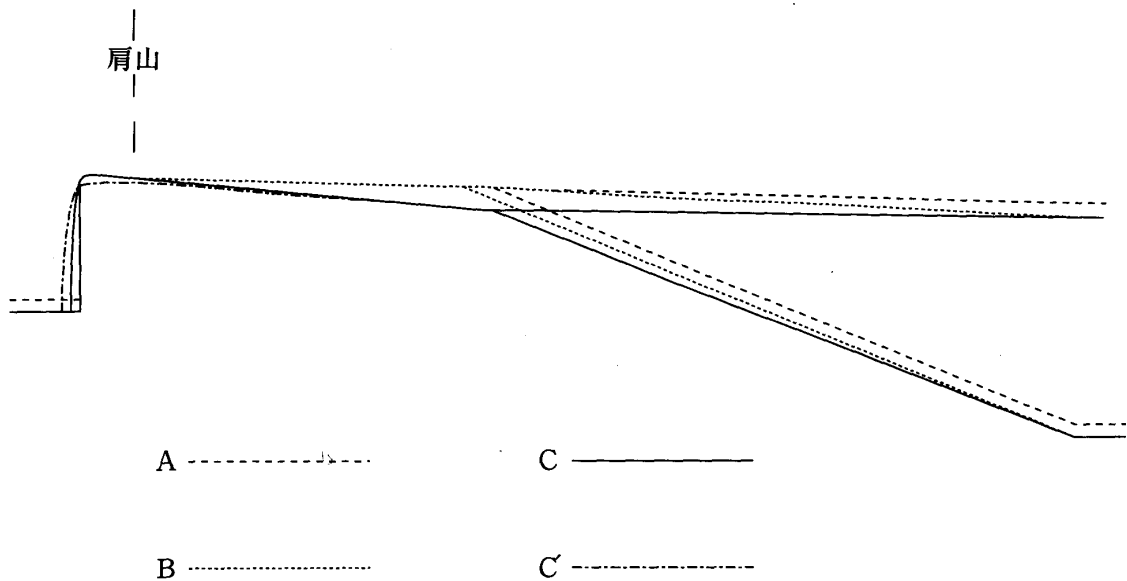
取り上げた裁縫書の趣旨を要約し、箇条書にすると以上のようになる。もちろん、細かい部分ではそれぞれの工夫がみられ、すべてを体系化することには無理がある。

この個々の条項は、これまでの着装実験でもしばしば見られるように、一ヶ所を是正したことが、他におよぼす影響は大きい。個々の体型にいかに関与するかは、実際に経験の積み重ねが必要になる。

## Ⅲ 着装実験

これまで抽出した体型に対する縫製上の対処・工夫は、比較的肥満体のものが多いように思われる。瘦身体の場合は身幅の考慮が、上半身におよぼす影響が少ないためかも知れないし、瘦せているというのは、全体的なもので部分の差異が小さいためかもしれない。

肥満体には腹部も胸部も大きい人、腹部または胸部が特に目立つ人といろいろな分け方をしている。そこで着装実験は第4報の被験者Ⅲ<sup>2)</sup>を対象とした。



第1図 試着衣の衿つけ線図

## 1. 裁縫書による修正

### (1) 試着衣の縫製

被験者Ⅲの体型は胸部・腹部の張った肥満体に属する。身幅を割り出し法によって求めた寸法を使用しても、肩の厚みを配慮する必要から、身丈を6cm長くして着装実験を行った結果は、第4報に記したように一応の成果がみられた。

この試着衣をさらに着やすくするために、裁縫書に記されている肥満体に対する縫製方法による是正を試みた。一つは剣先位置を上を移動するもので、いま一つは剣先位置を体の中央に寄せる方法である。第4報の修正後の試着衣をAとし、剣先位置の縦移動をB、横移動をCとする。なお、B・Cは腰周りの寸法をより腰囲に近づけるため、前幅を裾から80cmまで真直ぐにしてある。

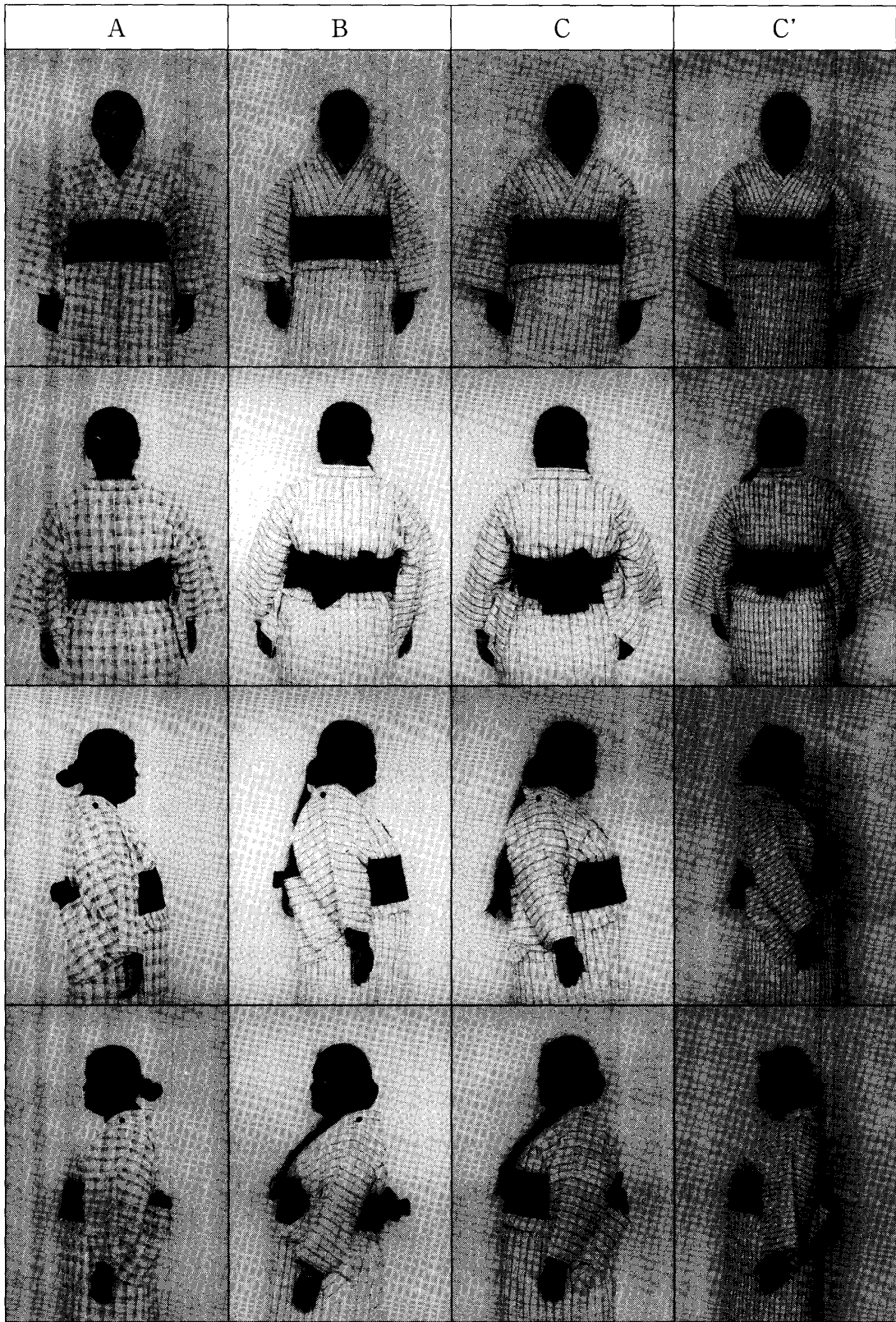
#### ① 試着衣B

剣先位置をAより2cmあげて衿肩明き寸法より0.5cm引いたところに決め、前幅と結んだもので、第1図に-----線で衿つけ位置が示してある。

#### ② 試着衣C

剣先位置を体の中央に移動し、衿肩明きのところで2cm控えて前幅と結び、その線上に衿下がり寸法28.5cmを取ったもので、図中には実線で示した。なお、試着衣Aの衿つけ線は-----線を表示してある。





第2図 着装実験 前面・背面・左右側面

## (2) 着装結果

着装方法はAと同じ条件とし、前面・背面および両側面から撮影したのが第2図である。これらの写真と着装時の観察によって、次のような結果が得られた。

- ① 試着衣Bのように剣先を上に移したときは、第1図に示したように、抱幅を広げる効果は少ない。したがって、胸元のゆとりは期待できない。
- ② 試着衣Cのように剣先を体の中央に移すれば、当然のことながら抱幅を広げる効果は認められ、胸元にゆとりが生じる。
- ③ 両者とも第2図の側面の写真で示したように、肩のポイントが後ろに移動し、背面のゆとりが多くなり、三つ衿の大きさが強調されるとともに、衿つけ際に横じわができた。
- ④ 肩のポイントが後ろに移動して背に布のたるみができ、衣紋が抜けないうえに衿山が寝て首に巻きつくようになり、肩まわりの衿に深い皺ができる。
- ⑤ 布が背面に引かれるため胸元のゆとりが少なく、より一層腹部肥満が強調される。

以上のことから、抱幅に余裕のある試着衣Cの再度の修正を試みることにした。

## 2. 試着衣Cの修正

肩のポイントを前に移動し、背面衿つけ線を上にあげるとともに、衣紋を少し抜いて衿山をたてるように、背面三つ衿部分の衿つけを是正することにした。背面衿つけ際の横じわをなくし、衣紋を抜き加減にするため、繰り越し量はそのままに、つけ込みを加えて衿肩明きを0.5cm少なくした。衿肩明き寸法を減らしたのは、羽生京子の研究「和服構成における体型と縫製との関係—繰り越し量について—」<sup>3)</sup>によるもので、繰り越し量の多い場合は、衿肩明き寸法を少なくするとよいと記されている。こうした修正を行って製作した試着衣C'とし、衿つけ線は第1図に-----で記してある。

修正した試着衣を写真撮影したものが、第2図C'である。是正の結果は肩のポイントが前に移動したため、背中がゆるみなくなり胸元にゆとりが生じた。つけ込みの結果、衣紋が抜けて衿山がたったため、肩まわりの衿の深い皺が除かれた。そして、胸元の適度なゆとりが、目立った腹部肥満を解消してすっきりした姿にしている。

## IV まとめ

被験者が着装した際「着やすい」「よい感じ」と発言したように、見た目にも美しく着こなせるよう修正できたことは一応の成果と言える。何回かの補正が、被験者の体型に則した和服を縫製できたということになる。一つの修正が他に影響をおよぼさず、欠点を補うこ

とができれば修正の体系化ができるであろう。それがなかなかできないところに平面的に構成したものを、立体的な体に合わせる難しさなのかもしれない。体型を区分することは困難であるが、今後も平面構成学演習を通して学生とともに究明していきたい。

## 文 献

- 1) 仲村洋子・永野順子：和洋女子大学紀要37 家政系編 P207～216 1997
- 2) 仲村洋子・永野順子：和洋女子大学紀要37 家政系編 P209 1997
- 3) 羽生京子：和洋女子大学紀要28 家政系編 P83～92 昭和63年

## 資料文献

- 1) 高橋貴四郎：新編裁縫之秘書 福岡県女子技芸教育会 大正4年
- 2) 塩原千代子：塩原式裁縫書 神戸女子高等技芸学校 裁縫研究部 大正5年
- 3) 大妻コタカ：現代和洋裁縫書 帝国女子教育社 昭和9年
- 4) 市橋なみ：中等学校・専門学校 裁縫の教材と其指導 成美堂書店 昭和11年
- 5) 新井兵吾編：和洋裁縫大全集 大日本雄弁会講談社 昭和12年
- 6) 藤田とら：和服裁縫 株式会社光文社 昭和24年
- 7) 岩松マス：写真と図解の和服裁縫 株式会社同志社 昭和36年
- 8) 土井幸代：和裁 東京同文書院 昭和44年
- 9) 阪本弘子編：新被服構成学 株式会社相川書房 1984
- 10) 村林益子：図説きものの仕立方 紫紅社 平成2年
- 11) 結城親学：独習自在裁縫初歩より奥儀まで 新進堂 大正11年
- 12) 原須賀：実用裁縫要鑑 帝国心城会・宝文館 昭和4年
- 13) 園浦かめの：実用本位の裁縫学習書裁縫のをしへ 日南出版社 昭和8年
- 14) 原田貞二編：裁縫の葉上の巻 誠修学院 昭和13年
- 15) 池部芳子他5名共著：改訂新版新和服裁縫（全） 株式会社建帛社 昭和41年
- 16) 稲田しげ監：改訂現代の和裁 株式会社建帛社 昭和46年

仲 村 洋 子（家政学部服飾造形学科助教授）

永 野 順 子（家政学部服飾造形学科教授）